

「石巻市大川小学校」

2016年10月31日

3・11の東日本大地震が起こり、未曾有の津波が押し寄せた。テレビの映像を見て、恐怖を感じた。その後、新聞や本で津波の実態を知り、更に被害の甚大さに心が痛んだ。現場を見たいと思い、仙台在住の牧師に依頼し、案内してもらった。岩手から宮城、福島までの海岸を車で、2泊3日、見て回った。映像とは違い、生々しい津波の傷跡に言葉を失った。その中で、最も心が痛んだのは、宮城県石巻市の大川小学校の児童を飲み込んだ惨劇だった。74人の児童が死亡・行方不明になり、教員も10人が犠牲になった。海岸から4km離れた、川沿いにある小さな小学校である。校庭に祭壇が作られ、花が手向けられていた。私も、恐怖の中で命を奪われた子どもたちのことを思い、しばらく黙禱を捧げた。

大川小学校から少し、南に下った所に、海沿いに立つ中学校があった。津波に襲われて校舎は壊され、廃校になっていた。プールに何トンもあるような岩が転がっていた。この中学校では、生徒たちを高台に避難させ、一人の犠牲者も出さなかった。

大川小学校で死亡・行方不明になった児童74人のうち、23人の遺族が、学校側の避難誘導の過失を問い、市と県に約23億円の損害賠償を求める裁判を起こした。子どもたちが死に至った経過の真相を知りたいと思ったのである。訴えなかった遺族もいた訳で、その人々は、裁判をしても子どもたちは帰ってこない、学校の責任を追及しても仕方ないと思ったのであろうか。

仙台地裁は10月26日、原告の主張を認め、約14億円の賠償を命じる判決を下した。学校側の児童を保護する責任を重く認めた判決であった。当然であろう。遺族たちは「子どもの声が届いた」と涙の「勝訴」として受け止めたようだ。

「東京新聞」が伝える時系列は下記の通りである。地震が起きたのは、午後2時46分であった。学校では、帰りの会が終わる頃で、ガタガタと揺れる音に児童たちは恐れ、机の下に潜り「怖い」「お母さん」と叫びながら必死に耐えた。3分後、揺れが収まり、教員たちは「落ち着いて避難しよう」と児童たちを校庭に誘導した。2時52分であった。校庭では行政防災無線が大津波警報の発令を伝えていた。3時前、校舎内の見回りを終えた教務主任が「山へ行くか」と提案した。児童からも親からも「山さ逃げよう」という声があった。小学校の裏には小高い杉山がある。しかし、山崩れがあるかも知れないので「難しい」という判断になった。小学校は津波の浸水想定区域外にあり、地域住民の避難場所に指定されていた。教員たちはどうすべきか迷ったであろう。市の広報車が小学校の前を通り「松林から津波が抜けてきた。避難を」と拡声器で呼びかけた。3時30分になっていた。この頃、教員たちは川沿いの三角地帯と言われた所を避難場所に決め、子どもたちを誘導し始めた。三角地帯は、校庭から150mくらい先で、標高1~1.5mの校庭より5~6m高い。私も、この三角地帯に立った。川面から相当高い。ここまで津波は来るだろうかと思った。子どもたちが避難場所に向かう3時37分頃、津波が川に沿って襲い、飲み込まれていった。一人の児童は偶然流れてきた冷蔵庫の中に入り、山に流され、奇跡的に助かった。助かったのはこの児童を含む4人であった。教員は10人が犠牲になり、教務主任の一人だけが生き延びた。私が訪ねた時、彼は心を病み勤務できない状態であると聞いた。

判決は命を預かる学校には重い責任があることを示した。子どもたちは帰ってこない。彼らの無念の死から、考えさせられることは多い。日本はいつどこで地震、津波に遭うか分からない。日ごろから、災害に備え、避難場所を決めておく必要がある。